

第1回（仮称）堺ミュージアム基本構想検討懇話会 議事録

1. 日時 令和7年7月31日（木） 13時00分～15時00分
2. 場所 堺市博物館ホール
3. 出席 構成員6名
和泉大樹構成員、稲葉信子構成員、國賀由美子構成員、佐藤郁子構成員、
藤野一夫構成員（座長代理）、藪田貫構成員（座長）
4. 傍聴者 9名
5. 会議次第
 - 開会
 - 構成員紹介
 - 座長選出・座長代理指名
 - 議事（仮称）堺ミュージアム基本構想（案）作成について
 - ・基本構想の策定にあたって
 - ・市政における位置づけ・堺市の概要・社会環境の変化・施設の沿革
 - ・堺市の文化施設を取り巻く課題
 - ・基本理念について
6. 議事等の内容
 - （1）座長等の選出
 - ・構成員の互選により、藪田構成員が座長に選出された。
 - ・その後、座長により、藤野構成員が座長代理に指名された。
 - （2）議事
（事務局）「基本構想（案）の策定にあたって（（仮称）堺ミュージアムのコンセプト）」説明

（事務局より 欠席された大澤構成員の意見）リニューアルの成果、博物館の本来活動の継承が、このコンセプトの中心となっている印象を受ける。ICOMの博物館定義などを参考に、博物館をめぐる現代的状況を踏まえ、新しいミュージアムが市民生活や社会にどう寄与していこうと考えているのかを表明する必要があるのではないかと考える。そのような考えに沿って、基本理念、取り組むべきことへのブレークダウンが求められる、そういう考え方をしてほしいと考える。

（事務局）頂いた意見を基に基本理念の内容について検討する。

(稲葉) コンセプトにある「歴史・文化の継承・発信・連携の拠点となる堺ミュージアム」が、単なる旧来の博物館の延長線上であるという印象を受けた。大澤構成員の意見も、このコンセプトでは発信、連携では足りない、もうすこし能動的に市民に出ていくものをやるために、博物館としてどういう機能を探せばいいかということか。

(事務局) 令和 6 年 1 月段階でこのようなコンセプトを設定した。これから完成をめざす基本構想(案)に向け、基本理念や取り組むべきことを落とし込んでいく作業を今年度進めたいと考えている。

(藪田) ICOM(国際博物館会議)が、2019年の京都大会を経て2022年に博物館の定義を変えた。いわゆる植民地社会の問題やSDGs、多様性の問題など、現在世界が抱えている問題そのものに、博物館自身がどう対応していくかを考えなければならないと思う。それが新しい博物館の役割であり、そういうニュアンスから、この「歴史・文化の継承・発信・連携の拠点」に対して、背景の問題を議論する必要があり、このコンセプトだけでいくには問題があるというのが大澤さんの意見ではないかと思う。

(事務局) 新たな文章の追加も含めて検討する。

(事務局) 「市政における位置づけ」、「堺市の概要」、「社会環境の変化」、「施設の沿革」、「令和6年度第2回市政モニターアンケート報告書」、「堺市の文化施設を取り巻く課題」、「文化財の調査、保存、公開活用に関する課題」について説明。

(和泉) ヒストリックカーは何台ぐらいあるのか。また、「8.文化施設を取り巻く課題」として文化財の調査・保存・公開活用で、「組織間での調整が必要であり、効果的な体制ではない」とあるが、この議論の中で組織的な問題や理想的な組織についてまで意見交換ができれば、という印象を持った。

(國賀) 登録博物館かつ公開承認施設をめざすということだが、ヒストリックカーの扱いは、非常に懸念される。ヒストリックカーを展示公開、収蔵するには、大きな開口部が必要になり、公開承認施設として影響してくると感じた。

(事務局) ヒストリックカーは50台ほど保有しているが、展示に耐えうるのは20台程度で、あとの30台程度は部品取りのためのもの。今回は博物館と美術館の融合だが、ヒストリックカーも市の有する魅力あるコンテンツとしてミュージアムに必要と考えている。登録施設への持っていきかたを考えた際に、バックヤードの併設や管理体制についても議論する必要があると考えている。

(事務局) まず基本理念を考え、それを下ろしていく段階で、取り組むべきこと、ミュージアムの役割、それに必要な施設や機能といったところのご意見を頂戴しようと考えている。そのような議論の中で、それを担う体制、組織の課題が浮かび上がり、そこで組織体制について検討していきたいと考えている。そこまで、この懇話会で踏み込めるかどうか定まっていない状況。

(稲葉) 富士山世界遺産センターと違いここは世界遺産だけではないので、堺市の歴史をきちんと伝えていくことが大事と思う。質問だが、博物館で文化財行政の一部を担っているということだが、職員を共有しているのか。

(事務局) 博物館では、調査、研究、収集、保存、展示、活用といったところを担っており、本庁の文化財課では文化財行政的な文化財指定や、補助金などを担当している。また、文化財課が埋蔵文化財を担当し、発掘調査を所管している。

(藤野) 堺 アルフォンス・ミュシャ館を視察して、これでは素晴らしい資産がうまく活かせていない、もったいないと感じた。寄贈いただいた世界的な財産が公共財になるのだから、公共が支援し、それなりのミュージアムをつくることで、価値を地域住民と国内、世界に向けて発信する義務を負っていると思う。そう考えると、今の施設は、天井も低く、当然美術館にあるべきバックヤードもほとんどなく、スペックとして、ちょっと恥ずかしいと感じた。新しいミュージアムができるに際して、ミュシャ作品を中心とした西洋美術なども目玉として、ぜひ輝かせていただきたい。

(事務局) -「基本理念」について説明-

(佐藤) 「観光」の世界において博物館がどうなっているかを紹介させていただく。観光の総合ホームページ「堺観光ガイド」において、堺市博物館に関する情報はほぼ掲載されておらず、博物館特集もずいぶん昔の情報だった。

現在、観光の市場がどうなっているのかを紹介すると、大きく二つの動きがある。一つはインバウンドの存在感が非常に急拡大している点、もう一つは日本人の国内旅行の動きについて、ほぼコロナ前の状況に戻って二極化と若者化している点。旅行に行かない人は全く行かないし、行く人はすぐ行くという二極化と、若者がコロナ禍を経て経験率を増やした一方でシニアは減っている状況。インバウンドに関して、これまでは看板の設置や英語表記など、とりあえず受けとめる整備をするだけだったが、これだけたくさんの人が増えてくると、もっとどうしていくか考えていく必要がある。また、二極化に関連して今まで広く一般に PR していたところを、これからはリピーターを来させる方法に展開していく必要がある。今まで博物館は、主にシニア層に PR してきたが、これからはおそらく若者のことを考えなければいけないと思う。美術館、博物館に行った人の割合は、温泉やテーマパークに行った人よりも多いが、次に行きたい人は少なく、リピーターをどう満足させていくかが、PR や広告で重要なところ。

観光マーケット的な考えで言うと、「観光」は結局、他都市や他施設との競争であり、競争に勝って選ばれることが結果を生むと考えると、堺の歴史や文化を全く知らない、興味もない人も惹きつける必要がある。そういう意味では、「歴史・文化、継承・発信・連携の拠点」というコンセプトは魅力的なのか、と思う。

また、基本理念について、観光に関する(3)の文章において 3 点指摘させていただく。一つ目は「観光客にとって来訪のきっかけ」として、重複する他施設より選ばれる目的地にならないといけない、堺市に行きたいでなく堺ミュージアムが目的地にならないといけない、選ばれるためにそこでの経験が観光客の期待に沿ったもの、あるいはそれを上回る必要があるのではないかと思う。博物館の「歴史を客観的事実に基づいて研究し、その成果を展示する」という趣旨からはデフォルメのようなことはできないので、博物館の本来的立場とは対するかもしれないが、選ばれる目的地になるということはそういうことではないかと思う。次に「認知度向上への寄与」と

あるが、認知度向上だけで本当にいいのか、ただ認知されるだけでなく、憧れとか、死ぬまでに行きたい、すごいという感情を喚起することをすべきではないかと思う。「観光」はそういうところがあり、憧れがないと行かない。3つ目は、周遊の促進。展示内容だけでなく、二次交通や他の施設で同じテーマ、イベントなどつながって体験できることがわからなければ周遊の促進施設になれない。他の施設や他の歴史拠点などと連携だけでなく価値を共創していこう、一緒に今までにないものをつくろうということが必要ではないか。ミュージアムをつくるのが、観光関係者にとってもメリットがある、博物館だけの問題でないということを共通理解にするべきではないかと思った。

博物館の従来の学術的な施設、ということより、「観光」として感情に訴え、競合に勝ち、期待を上回る経験をさせる施設をめざすと考えていただけないものかと考える。他の施設と比べ、堺ミュージアムではこんな体験ができる、感情を揺さぶるような特徴が必要であり、全方位的でなく、一点突破やポジションがはっきりしている必要があると考える。堺の観光的価値の魅力としては、古墳群の規模や時間軸の両面でのスケール、また、展示では見えないけれども、なぜこんなものができたのだろうかという不思議さのようなものを前面に出したい。理解するというより、感じ、すごい、立ちすくむというような経験を、みんなにさせてあげられるということをしたいと思う。コンセプトの案として、なぜそこにこんなものが、不思議が深まる世界の博物館、堺ミュージアムなどはどうか。

(稲葉) いわゆる文化施設、文化財を観光に役立てるのは、日本の中ではなかなか難しい。日本遺産、世界遺産も通すためにはキャッチを考えていかなくてはならない。具体性をもってきた時に、ロゴや宣伝の文句を考えていく必要がある。

(藤野) 昨年、第3期関西観光文化振興計画をとりまとめたので、その概要を紹介する。観光文化振興に向けた将来像として、文化と観光で織りなす創造の関西、クリエイティブ関西という形にした。文化観光という言葉が所々に入っているが、市民意識の向上や醸成というのはなかなか簡単にはいかないだろうと感じていた。住民と連携、共同し、地域コミュニティの核としての役割を担うことは、実は一番大変なことではあり、場所だけの問題でなく、マンパワーも必要であり、市民自治、住民自治というものに関わってくることから、ここをレベルアップというか定着させていくことがすごく大変なのではないかと考える。言葉を変えると、コミュニティエンゲージメント、ここをどうやっていこうか一つ要点になると思う。

日本博物館協会が2000年に出した「対話と連携」の博物館で、市民とともに作る新時代博物館として対話と連携の活動原則をあげており、これも有効と考えられ、地域連携から国際連携へというベクトル、そういったことも果たしていただきたいと思う。もう一つ、2019年の文化審議会の博物館部会の答申「博物館制度の対応のあり方」では「つなぐ」がすごく重視されている。文化の結節点、カルチュラルハブとしての博物館の役割が強調されていて、既知と未知をつなぐ、世代をつなぐ、人々をつなぐ、交流や共創として人々の居場所となり、様々な活動を生むと言われている。多様な文化と分野をつなぐ、異なる文化との対話が生まれ、学問分野を超えた総合的な知をもたらす、多様な立場への理解を促すということが言われている。これは文化観光に関連するが、住民（ホスト）と来訪者（ゲスト）をつなぐ、観光振興や地域活性化につながる「つなぐ」というキーワードはとても重要であり、そういった一つのトレンドが基本理念に埋め込まれるといいのではないかと考える。この「つなぐ」というキーワードをもう少し活用して理念の中に盛り込んでいけば、その間に現実味のある社会実装可能なものになっていくのではないかと。

(藪田) おそらく何度もこの議論をして、ある種共通のイメージをつくり上げなければならないと思う。佐藤構成員が言われた「観光」は一つの大きな視点と思う。世界の観光を考えると、世界遺産はまさに世界中で競争し合っている状態であり、そういうことと博物館あるいは美術館、センターを含めどう関わっていくのかについて議論する必要がある。

(稲葉) 大英博物館やルーブル美術館はあの所蔵品を觀に、みんなが行くものだが、そうではなく、面白いから行ってみたいと思われる海外の例は調査しているか。

(事務局) 世界レベルの視野において面白い、行ってみたいというところまではまだ調査できていない。

(稲葉) そういう博物館、美術館ないし施設について基本理念がどう書かれているか、所蔵品だけで売っていない良いところが海外にないか、私たちも知っておきたいと思う。

(藪田) 私は所蔵品がどんなものが重要で、観光に行くという感覚はない。やっぱり、その持つ所蔵品が見たいからで、しかも1回でなくて、2回3回見てみたいということがある。しかし、それはどんな所蔵品でもいいわけではなく、世界の人にアピールできる所蔵品であるということが大事。それは規模の問題ではなく、やはりいい所蔵品があるかどうか。これまで蓄積してきたものを、どれだけ研究、調査し、磨いて、発信していくかということに関わってくる。これからやれることはいくらでもあると思われ、今までの実績をどうしていくか、そういう議論をしてはと思う。

もう一つは、こどもが博物館にどれだけ馴染むか。こどもが博物館を十分使っているかどうか、現場の先生方はものすごく懐疑的。教科書以外にタブレットが授業で使われ、博物館が入る隙間がいっぱいできたが、学校現場のタブレットと博物館の所蔵品とは連携できているのか。タブレットで見たものを現物で見たいと思った時、地域にある小さな博物館のほうが訪れやすいと考える。コミュニティの中の学校教育として考える必要があり、そういう仕分けのようなことも重要と思われる。

(和泉) この博物館は「堺市」の博物館なので、イメージは、やはり地域の博物館、市の博物館であり、まずは地域とのつながりをきっちり理解すべきかと思う。博物館は教育施設という考え方が強いので、博物館に顕著に観光を反映するのはなかなか難しいところだが、「観光」により地域や人を「つなぐ」とか、何か「創造」されるという観点からは、「観光」と地域の博物館は親和性が高い気がする。先程、委員のみなさまが言われたように、所蔵品が人を惹きつけるところもあると思うが、この博物館がそういうところかという、現状からの私のイメージではどうなのかと思う。

また、理念に「堺の認知度の向上に寄与」とあるが、もちろんそうした役割もあるとは思うが、博物館としての理念に書く必要があるのかどうか疑問に感じる。もう1つ、市の博物館という点では、例えば、沖縄県で調査をしたとき、沖縄の博物館は、地域の方よりも観光客を意識しているため、沖縄のこばかりを展示する傾向にあるので、沖縄の人に沖縄以外の文化に触れる機会を提供するという役割も重要ではないかと思ったが、堺市博物館においても、堺のことを一生懸命展示することも重要だと思うが、堺市のみなさんに別の文化に触れるような機会を提供するという役割もあるのではないかと考えている。私はこの博物館が地域博物館である

と思っており、もちろん世界にも開いていく必要もあるが、地域住民にとっての博物館、観光という観点からワールドワイドに考える博物館など、求められる役割はさまざまであると思う。この点はきちんと議論しなければいけないのかなと思う。

(國賀) 博物館の経営資源が何かについても、振り返っていただくことが大事ではないかと思っている。もちろんまず「ヒト」、館で働く方はもちろん、来館者もその博物館の経営資源だと思う。また所蔵品をはじめとして、市民に向け、市民の方の要求に答えることも非常に大事なことだと思われ、そういう意味では、拝借してくる「モノ(資料)」も経営資源の一つとして重要だと考える。それともちろん「ハコ」も重要。今これから「ハコ」をつくらうとされていることが大きく、経営資源の一つとしてこれから機能してくるので、そういう意味では「ハコ」をどうするかは非常に大事。

この「1.基本構想の策定にあたって」の3つ目に「ミュシャ作品をはじめとした本市のコレクション」という表現があるが、ミュシャ作品が代表で、ミュシャ作品をこれから経営資源の一番売りにしていく、という理解になってしまふと思われ、ここを疑問に思った。また、経営資源の観点から言うと、基本理念(2)では「資料を最適な環境で永続的に保管、継承」では「モノ(資料)」について触れていて、(5)では来館者、「ヒト」のこと、「グローバル化、多様化する現代社会において、すべての人が平等に情報収集、活用できるデジタル技術」となっている。もちろんデジタル技術もこれからコンテンツとして非常に重要なところだが、「多様化、すべての人が平等に」というところでデジタルだけがすべてなのかなと感じた。「ハコ」をつくるということにおいて、バリアフリーの問題がまず注意すべきところかと思った次第。そういう多様化する現代社会においてすべての人々が平等に情報収集活用できる場である、という意味合いが重要かと思った。「ハコ」をつくるにあたっては、「ヒト」の動線、「モノ」の動線、双方を確実にわけ、「ヒト」にとっても「モノ」にとっても安全快適なミュージアムをめざすという、そういう形の表現のほうが、この(2)と(5)を一緒にし、かつちよつとよりわけるといい感じになる。今回のこの基本理念(1)から(6)は、もう少し整理された形で提示していただき、また先ほど和泉構成員のお話にもあった地元の堺市民に向けもう少し発信されるような文言も含まれたらいいのではないかと感じた。

(事務局より 欠席された大澤構成員の意見) 大澤構成員からは、全体として、この新しいミュージアムと堺市の既存の施設、博物館との関係を整理してほしいというご意見をいただいた。(仮称)堺ミュージアムは市立の博物館施設として一番大きな規模と機能を持つことになるが、このリニューアルを機に全体の関係性が整理されて、堺ミュージアムを中核館として、各館との有機的な連携を確立する方向もあり得ると考えるが、その点はいかがか、というご意見を頂戴した。

(稲葉) 博物館としての本来業務は、資料を保管、研究することであり、大事な業務として進めていただきますが、プラスしてインターフェースをどうするかも重要。博物館の所蔵品に目玉があるのか、シリーズで語るのか、レプリカを出すのかなど、真横にある世界遺産である百舌鳥・古市古墳群をどうやって活用していくのか、集客機能、要するに客寄せのための施設は多分デザインの問題ではないかと。デザインと展示のインターフェースの問題も大きく関わっており、市の方は予算立てとか計画に対して、そこまで考えてもらわなければならないということ、今ここで言うておく。単なる保管と展示と研究機能はそれで最低限のものだけでも、それを超えて、こどもにも喜ばれて二度目も行こうかと思うような施設にするためには、やはり装置であり、装置の方をちゃんと考慮

していただけるように、事務局で考えてもらわなければいけないと思う。デザインの段階に入ったら、実は収蔵庫しかないということだと困ると思うので、よろしく願いいたします。

(藪田) 調べてほしいことやリクエストがあれば示していただきたい。それぞれの博物館関係、地域の施設などについて数値化されたものはあるか。

(事務局) 入館者数や観覧者数、年ごとのデータは把握しているが、満足度については各館では完全には把握ができていない状況。

(藪田) 博物館は、子育てと並んで都市間競争の大きな一つの戦略と思われ、最近つくられた博物館における設置意図などを調べていただきたい。政令都市である堺は中核都市とは異なっており、堺の都市の格、歴史の格は相当高いものがある。そこにある博物館として、地元の人が満足するほか、国際的な影響力という点でも劣ってはダメだと思う。神戸市では、博物館と北野の異人館と二か所で神戸の国際都市という側面を見せている。他の都市がどのようにしておられるのかを参考にすることも大事だと考える。

(事務局) 新しく開館したいいくつかの博物館に対して聞き取りなどしており、参考にしていきたい。

(稲葉) これまでの博物館・美術館は、展示テーマがはっきりしていてわかりやすいが、いただいている基本理念が網羅的でわかりにくいかもしれない。この博物館のコレクションで、何を目玉に、どういうストーリーを見せていくのかということをはっきりさせる必要があると考える。

(藤野) 今回のように美術館と博物館が一体化されると、価値観の違いや、経験値の違いが行政側にも出てくると思われ、その辺のつなぎ方や連携がとても重要になってくると考える。縦割りにならないように、どう組織に揭げていくか検討する必要がある。

(藪田) 本日の懇話会を終了します。

(事務局) 第2回の懇話会は9月11日木曜日、午後1時より、本日と同じ堺市博物館ホールでの開催を予定しています。(仮称)堺ミュージアムの求められる役割等と必要となる機能について、ご意見をお聞かせください。